

【Meeting Room 7】自由研究発表第3セッション

(資料紹介)『南洋と日本人』写真/写真絵葉書百選

青木 澄夫

中部大学・元教授／JICA・元職員

発表者は、本学会第90回研究大会（2013年）で「東南アジアで販売された絵葉書に見る日本人写真師の『まなざし』」と題して、第二次世界大戦以前に「南洋」（表南洋/外南洋）と呼ばれた東南アジア地域で活動した日本人写真師について報告した。

2015年には、科研費の成果発表として、「日本人が残した写真絵葉書に見る100年前の東南アジア 付アフリカ」展を中部大学民族資料博物館で開催し、56頁のカタログを研究機関や希望する本学会員等に配布した。

以降、東南アジアの日本人経営の写真館、商店、ホテル等が撮影・製作・販売等に関与した図像資料などの収集と調査に努め、現在その店数は130余店に及んでいる。

この研究成果の一部は、シンガポール日本人会が2016年に刊行した『シンガポール日本人社会百年史』の戦前の部に収め、2017年には『写真絵葉書に見る100年前のインドネシア』（協力/翻訳：パジャジャラン大学）をじゃかるた新聞社から上梓した。

東南アジアにおける写真師については、松本逸也の『シャムの写真師』による磯長海洲が知られているが、他にもタイ・バンコクのプロム写真館、マレーシア・クアラルンプールの中島写真館、フィリピン・マニラのサン・スタジオ、ベトナム・ハノイの渡辺写真館、インドネシアで豪華写真集『スマトラ ジャワ バリ』を英語・オランダ語併記で刊行したトサリ・スタジオ（K. T. Satake）などの作品は、当時から好評だった。

また、撮影者は不詳なるも、写真絵葉書を製作した日本商店は、ミャンマーの藤井商会や山田商会、インドネシアの島根商会や南洋商会などがあげられる。1920年代からシンガポールを中心に爆発的に流行したRPPC（Real Photo Postcard）の多くは、記名がないため撮影者を特定できないが、そのほとんどは、日本写真館によるものだ。

今回の発表では、これら日本写真館や日本商店の作品や、日本人や日本の文化を被写体にした写真や写真絵葉書等等100点を、発表者のコレクションから紹介する。

東南アジアを旅すると、戦前の日本人の活動についての情報提供を希望する声をしばしば聞く。東南アジア諸国や欧米・大洋州諸国の公文書館や研究機関などでは、史資料を積極的に収集・研究し、書籍の刊行やインターネット上での公開を行っている。

発表者のコレクションは、これらの機関とは質量ともに比べるべくもないが、その特性は、日本人が撮影・製作・販売等に関わったものであるということだ。

本学会員が所属する国内の研究、教育、調査、交流機関等で、こうした史資料の保存・活用や、国内外への公開について、ご関心のある機関はないだろうか。

先人たちの足跡を後世に伝え、また東南アジアの人々の歴史に少しでも彩を添えることができれば、幸いに思う。